

## アダム・スミスの虚像と実像

アダム・スミス。この歴史上の偉人はかつてこう書き記した。「富と名誉と昇進をめざす競走のなかで、個人は可能な限り懸命に走り、すべての競争相手より勝るために、すべての神経と筋力を精一杯使っても良いのである。だが、もし彼が競争相手の誰かを押し下り、投げ倒したりしたら、見物人の寛恕は完全に尽きるだろう。それはフェアプレイの侵犯であり、誰も認めることができないからである」。

アダム・スミスといえば

# 経済学の原点を見つめ直す



名古屋経済大学  
経済学部准教授

大塚 雄太

多くの人は『国富論（諸国民の富）』を思い出すことだろう。それは経済学生誕の記念碑であり、ゆえに彼

は「経済学の父」と呼ばれ、「（神の）見えざる手」が経済学の基本原理を象徴し、「自由放任主義」が彼の思想的立場を表現するといわれる。スミスに関する教科書的理解はおおよそそんなところではないだろうか。そこで、あえて次のような疑問を投げかけたい。スミスは「経済学者」だったのか。彼には『道徳感情論』というもうひとつの著作がある。その存在を知る人は少ない。

スミスは道徳哲学の教授であった。道徳哲学は人文・社会科学全般を包括するような学際性に富む学問であり、ひろく人間と社会の諸原理を探究する学科であった。『国富論』出版からあり方を総合的に追究した生誕時の経済学の姿はほとんど知らされていない。加えて、スミス＝自由放任主義者という教科書の記述が長らく固定された結果、誤ったスミス像がすっかり定着してしまっている。高島善哉『アダム・スミス』（1968年）、水田洋『アダム・スミス―自由主義とは何か』（1997年）、堂目卓生『アダム・スミス―「道徳感情論」と「国富論」の世界』（2008年）とスミスに関する代表的な入門書を辿ってみると、そのどれもが彼は自由放任主義者ではなかったと断言している。およそ50年前、「教養の量的な拡大が質的な深まりを伴わない」ことに高島は警鐘を鳴らしたが、それはいまだ鳴り止んではない。

遡ること17年。1759年に『道徳感情論』は出版された。要するに、経済学が彼のすべてであったわけではなく、むしろそれは彼の道徳哲学の一部分でしかなかったのである。テレビに出るような経済学者のイメージをもって見つめられたら、スミスは冷や汗をかくに違いない。

昨今、経済学部に入學してくる学生の多くは、経済学をテクニカルな学問と教えられてきている。経済学にそうした側面があることは事実だが、人間と社会の

改めて冒頭に引用した『道徳感情論』の一節を読み返してみたい。自由競争にはフェアプレイという条件がある。自由放任では逆説的にも、各人が真に自由に生きることができない。そう考えるからこそスミスも、経済学の前提としての『道徳感情論』を生涯大事にし、晩年まで改訂を続けたのであった。安直に、もっと古典が読まれるべきだとは言わない。しかし、経済学とはどのような学問であったのか、そして常識や通説なるものが本当に正しいのか。スミスの真の姿に触れるための第一歩は、この素朴な問いにある。

おおつか ゆうた 社会思想史・経済学史。名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了、博士（経済学）。名古屋大学経済学研究科および高等研究院を経て現職。1998年生まれ。

